

10年前 わたしはどこにでもいる少女だった。

10年前 わたしの妹はてくてくだった。

わたしは夏が大好きだ。

てくてくは夏が苦手だ。

わたしは日差の中を駆け回る。

てくてくは木陰でじっとしてる。

「一緒に遊ぼうか？」

「そうか。木陰の方が楽しいか」

でも わたしは日向が好きだから、ここは譲れない。

見上げれば空一杯に光が溢れている。

てくてくは必死で木陰に逃げる。

やがて太陽は東から西へ 次第に陰が伸びていく。

ここからはてくてくの時間だ。

あっちの影からこっちの影へ てくてく、てくてく動き出す。

「わたしはそろそろ帰らなくちゃ」

てくてくに手を振って公園を出る。

すると何故かてくてくがわたしの陰についてくる。

そうだった

てくてくはわたしの妹だったのだ。

10年後 どこにでもいる女子大生のわたしは妹に尋ねる。

「てくてくは日向に出るとしんでしまうの？」

10年後 どこにでもいる女子高生の妹は答える。

「はっ？ てくてくって何？」

ずっとわたしの影を歩いていたあの子は、どこへ行ってしまったのだろうか？